OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	規則に沿って生きること : アメリカ文学における野球規則を読む
Author(s)	中村, 瑞樹
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 67-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91582
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

規則に沿って生きること―アメリカ文学における野球規則を読む[1]

中村　瑞樹

1.　はじめに

筆者は 2023 年 2 月に、大阪大学次世代挑戦的研究者育成プロジェクトの北米研修に参加し、サンフランシスコに約 1 週間滞在する機会があり、現地滞在中に Alcatraz 島に行くことができた。Alcatraz 島とは Al Capone をはじめとする、アメリカの凶悪犯罪者たちを収容していた刑務所が位置した孤島であり、現在はその跡地が観光施設として残っている。その中で筆者の興味を引いたのが、囚人たちの余暇について言及するパネル（図 1）である。20 世紀初頭の囚人たちが余暇の野球で用いていたとされるバットやグローブが展示されていたのである。

【図 1】 Alcatraz 島での Recreation Yard に関する展示（筆者撮影）

この展示を見て、筆者がまず思い出したのが、Robert Elias が *Baseball and the American Dream* にて言及している次の一節である。

> Baseball has been used to demonstrate the benefits of play, team spirit, and sportsmanship. Playing the game has been regarded as a preventative against things such as crime, violence, delinquency, and even the stresses of modern life. Baseball, it is said, promotes positive values such as honesty, fair play, wholesomeness, and other aspects of the American way. (12; underline mine)

これに従えば、アメリカの刑務所における余暇の野球は、囚人に対して「好ましいアメリカ的価値観」を教育し、再犯防止を目指すための場の一つとして機能していたことになる。規則に準じてゲームが進み、その枠組みの中で勝敗が決する野球をすることは、ルールに従って社会で生きていくことのアナロジーであり、野球は受刑者たちが規則遵守を学び直し更生するための教材としての役割を担ったのである。もちろん、野球以外のスポーツでもこうした目的は達成されうるだろうし、さらには、社会の法を犯した者だけでなく、これから社会の法を学ぶ少年なども対象となりうるのだが、規則に従って野球をすることが、法治国家アメリカで生きていくための健全な精神の育成に寄与すると考えられていたのである。[2]

さて、今年度の言語文化共同研究プロジェクトのテーマ「レトリックと文法」に対して、筆者の専門であるアメリカ野球文学からどのようなアプローチが可能かを考えていたところ、ちょうど Alcatraz 島でのこの経験があり、アメリカ野球文学と文法のリンクを見出すことができた。本稿では、同じ「法」という枠組みから、野球における法である「野球規則」に焦点を当てて、アメリカ文学を論じてみようと思い至ったのである。

野球規則の話に入る前に、言語学の視点から、文法とレトリックの関係について少しだけ言及しておきたい。例えば、Raymond W. Gibb による“the widely held assumption in linguistics and philosophy [is] that tropes violate, or ‘flout,’ norms of cooperative conversation.” (253)という指摘がその一例となるように、比喩や修辞表現は日常言語からの逸脱であると扱われてきたところがある。これを言い換えると、言語やコミュニケーションには素地となるルール（文法）があり、それらを逸脱することが、修辞的効果を生み出すきっかけとなりうるのである。（もちろん、後述するよ

[1] 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2138 の支援を受けたものです。

[2] Wiley Lee Umphlett は、スポーツがアメリカ文学で使われ始めた頃は、若者向けの作品がほとんどだったことを指摘したうえで、その理由を“[J]uvenile sports novels . . . had societal approval in the main in that their primary objective was didactic: to teach young readers manly virtues such as fair play and the rewards of hard work in meeting a challenge and/or achieving a goal and, most importantly, to create a healthy respect for authority.” (12)と説明している。ここに示されているように、スポーツそのもの、そして文学におけるスポーツは、若者が社会で生きる上での教材として長年利用されてきたのだ。

うに、現実的なレベルで言えば、破格を許容させるほどのレトリックの効果の存在が前提になるのだが。）

さて、これをスポーツに当てはめると、どうなるだろうか。言語では文法が修辞技法を生む素地を提供する一方で、スポーツにおいては「規則から逸脱する」ことは原則許されず、処分の対象となる。上述の囚人と野球の関係でも見られたように、スポーツとは、規則を遵守すべき場なのである。こういったスポーツにおける規則を文学作品はどのように扱っているのか。これを、筆者の専門である野球を例に取り上げ探っていくのが本稿の目的である。本稿では、野球を定義する要素の 1 つである「野球規則」のアメリカ野球文学中での役割を概観し、1)野球規則を作品に取り入れることにはどのような効果があるのか、2)野球規則が持つ文化的・文学的意義とは何なのか、さらには 3)ルールを守る/破るということはどのように扱われるのか、といった視点から、アメリカ文学作品からの引用を含めつつ、議論を行ってみたい。

2. 野球を学びアメリカに生きるアイロニー

まず、本節では「はじめに」のセクションで言及した「囚人と野球」を出発点に、刑務所で野球を学んだ人物が主人公である August Wilson の *Fences* (1986)という劇作品を取り上げたい。Wilson はアメリカを代表する黒人劇作家で、「ピッツバーグ・サイクル」という、20 世紀を 10 年ごとに区切った各年代を時代背景に設定した、アメリカ黒人の苦悩を描く合計 10 作品から成るサイクル劇を完成させたことで著名である。*Fences* はその 3 作目にあたる、1950 年代を描いた作品である。主人公は、元ネグロ・リーグのスラッガーTroy Maxson で、劇は 1957 年、彼が 53 歳の頃から始まる。彼は青年期に犯した強盗殺人が原因で投獄されていたが、53 歳の彼は“that fifteen years [in the penitentiary] cured me of that robbing stuff.” (55)と刑務所での日々を振り返っているように、服役を経て更生できたと考えている。事実、妻 Rose と結婚し、貧しいながらも一家の長として勤労に奮闘しているなど、出所後の彼は健全なアメリカ市民として生きているようにみえる。（実際には、彼の不倫が明るみになり、家族の調和が失われていくのだが。）さらに、彼は刑務所での日々で野球を学んでおり、出所の際にはプロ野球選手になるという、彼なりのアメリカン・ドリームを手にしてもいた。これらを踏まえると、「規則のもとに行われる野球をしたこと」が彼の更生の一翼を担っていたと考えることは決して的外れではないだろう。その意味で Troy は、先ほどの Elias からの引用にあった、再犯防止の目的も期待された、規則に従い野球をすることを通してアメリカ的価値観・健全な市民像を手にした 1 人であり、良き市民を育てるための教材としての野球の価値を証明する存在とも呼べるのである。

野球を通して、健全なアメリカ市民像だけでなく、彼なりのアメリカン・ドリームまでも手にした Troy だったが、一方で、出所後のアメリカの現実は、野球が促進するとされる「好ましいアメリカ的価値観」だけでは生きていけないことを彼に思い知らせる。例えば、1904 年生まれの Troy にとって、Jackie Robinson が Major League Baseball（以下、MLB）でデビューしたのは彼が 43 歳の頃であり、彼が選手として全盛の頃は、MLB は黒人に対して門戸を開いていなかった。たとえ刑務所で野球を楽しめたとしても、出所後のアメリカ社会で彼がプロとして活躍できる場はネグロ・リーグしかなく、アメリカでの名声をほしいままにできる場などそもそもなかったのだ。そんな彼は、1957 年時点でも、MLB でプレーする黒人選手に対して懐疑的であり、いまだに自身の方が優れていると主張している。さらに、息子 Cory がアメリカン・フットボールの推薦選手として大学進学目前だったにもかかわらず、黒人がアメリカスポーツ界で活躍できないことを身に染みるほど実感していた Troy は、その推薦を勝手に破棄してしまう。こうした彼の状況が示すように、Troy は野球を通してアメリカ的価値観を塗り込まれたものの、その理想的なアメリカ観が称揚するような民主主義的思想の恩恵を受けることはできず、対照的に、人種差別の現実、つまり、WASP 中心のイデオロギーのもとに叶うことのない黒人のアメリカン・ドリームの悲劇を思い知らされたのだった。野球を通して得られるとされる「好ましいアメリカ的価値観」は、WASP 中心主義的な社会への順応（conformity）を促す媒体に過ぎず、個人がアメリカで花を咲かせられるかどうかは、また別問題であり、Troy らマイノリティーは、規則に沿って野球をしたところで、白人中心の不文律という bylaw に翻弄され続けていたのである。野球を学ぶことで、アメリカ文化へのリテラシーは身に付くかもしれないが、そのリテラシーを手に彼らが眺めるアメリカの現

実は、まさにアメリカン・ナイトメアだったのだ。

こうした事例は、Troy のような黒人選手だけに当てはまるものではない。今やイチロー選手が日米両方の野球史に残る偉大な名選手であることに異議を唱える者は誰もいないだろうが、これほどまでの伝説的な功績を数々残した彼に対して、Ichiro と Cockroach を合わせた“Ichiroach”という侮辱的なニックネームが生まれてもいる。辞書を引くまでもなく、人間をゴキブリに喩えることが褒め言葉になるはずはない。豪快なホームランに代表される、アメリカで好まれるような spectacular なプレーではなく、（内野）安打を狙い、盗塁をし、俊足でダイヤモンドを駆け抜けていくイチロー選手の姿は、まるでゴキブリが部屋を走り回るかのような不快な野球スタイルに映ったのだろう。イチロー選手のような模範的な野球選手さえも、好意的に受け入れられない人がいたということは、野球規則が表象しうるアメリカ文化の現実を炙り出す。野球と関連付けられる「好ましいアメリカ的価値観」は氷山の一角にすぎず、実際には「アメリカ人になれる」人物を選抜する不文律も含めてはじめて、アメリカの現実を読み解くことになると言えるからである。

以上みてきたように、野球規則を学ぶ/知る、そしてその規則に従って野球をすることは、アメリカ的価値観を身に付けるという表向きの利益だけでなく、アメリカ社会・文化への順応（conformity）への足固めとして機能している。そして、上で取り上げた Elias の指摘する「好ましい価値観」は、WASP 中心主義的なイデオロギーが優位であるアメリカで好ましいとされるもの、として捉えられるべきなのである。アメリカの鏡としての野球を定義する野球規則は、アメリカ的価値観を保持する土台を提供する一方で、その価値観に従いアメリカで生きていくには、それに付随する不文律の存在は見逃せないのだ。

3. 明文化と文明 – アメリカの覇権のメトニミー

野球とアメリカ精神の密接な関係に言及する際に必ず引用される Jacques Barzun の“Whoever wants to know the heart of America should learn baseball.” (159)という言葉が示すように、Barzun は野球を学ぶことはアメリカ人になるための通過儀礼の 1 つとしてふさわしいと捉えていた。彼の意図に反し、この言葉がアイロニックなコノテーションを運びうることは、前節で確認した通りである。とはいえ、野球がアメリカ人の心に住み着いた national pastime であることに相違なく、アメリカ文化において揺るぎない存在価値を持ち続けているのもまた真である。例えば、野球好きとして知られる現代アメリカを代表する作家の 1 人 Paul Auster はエッセイ *The Invention of Solitude* (1982)で、変わりゆくアメリカで変わらないものとしての野球の地位について語っている。

> He [Paul Auster] reads in a book: since 1893 (the year before his grandfather was born), when the pitcher’s mound was moved back ten feet, the shape of the field has not changed. The diamond is a part of our consciousness. Its pristine geometry of white lines, green grass, and brown dirt is an icon as familiar as the stars and stripes. As opposed to just about everything else in American life during this century, baseball has remained constant. Except for a few minor alterations (artificial turf, designated hitters), the game as it is played today is remarkably similar to the one played by Wee Wilie Keeler and the old Baltimore Orioles. (123-4; underline mine)

彼が示しているのは、野球規則によって規定されるダイヤモンドの形、塁間の長さが星条旗同様にアメリカを表象するアイコンであること、そして、これらが長年変更されなかったことで、野球は変わり続けるアメリカの中で変わらないものとしての存在価値を手にし、アメリカ文化の sanctuary のような役割を担ってきたことである。野球規則の存在は、野球というスポーツの枠組みを維持してきただけでなく、たとえ普段意識されなくとも、その枠組みが維持されることで、アメリカ人の心に安らぎまでもたらしてきたのである。

Philip Roth の *The Great American Novel* (1973、 以下 *GAN)*に登場する General Oakhart も、野球規則（the Rules and the Regulation）を変えることは、アメリカ性までをも揺るがす大事件だと捉えており、野球規則を遵守することの重要性を子どもたちに次のように熱弁している。

> And that is why I would impress upon your young minds a belief in following to the letter, the Rules and the Regulations, as they have been laid down by thoughtful and serious men before you or I were ever born, and as they have survived in baseball for a hundred years now, and in human life since the

> dawn of civilization. Boys and girls, take away the Rules and the Regulations, and you don't *have* civilized life as we know and revere it. If I have any advice for you today, it's this – don't try to shorten the base paths in order to reach home plate faster and score. All you have accomplished by that technique is to cheapen the value of a run. (53; emphasis original)

後述するように、こうした General Oakhart の野球規則への盲信は Roth による皮肉の対象なのだが、Oakhart 曰く、先人の知恵の集積と言える野球規則を軽んじることは、アメリカの心の拠り所を手放すことに等しい。さらに、Oakhart の発言では、野球規則をないがしろにすることは、その対の概念である「野蛮(wild)」な劣悪世界への回帰と結びつけられている。野球規則そのものが、アメリカ性を体現するテキストであるだけでなく、成文化された規則制度に則ってプレーされる球技の存在が、アメリカが文明化した社会であることの象徴として捉えられているのである。[3]事実、明文化された規則に沿って行われる国技の存在は、アメリカが文明化していることのメタファーとして、さらにはアメリカ例外主義のメタファーとして機能している。

ここでは、Nakamura (2023)で論じた、Don DeLillo の *Underworld* (1997)におけるアメリカ例外主義のメタファーとしての野球に言及してみたい。本作中では、アメリカ人男性 3 人とイギリス人女性 1 人の 4 人組が野球を見ながら会食しているシーンがあり、BBC のプロデューサーJane Farish は、野球について全く知らない人物として造形されている。イギリス人かつ女性が野球を知らないという、ステレオタイプが二重に反映されている Farish に対して、アメリカ人男性 3 人は野球を紹介していく。この会話では、Donnie Moore という黒人野球選手の悲劇への言及がその役割を担うように、野球はアメリカ社会の縮図として、Farish がアメリカを理解するための教材として機能している。さらに、彼らの別れの場面では、"Farish had some questions about the infield fly rule. Sims and Glassic were able to get together on this by the time we got out to the car. It was an unexpected boon for the BBC" (100)とも書かれている。インフィールド・フライという、比較的専門的なルールについて彼女が知ることについて「予期せぬ恩恵(an unexpected boon)」と書かれていることは、野球のある国アメリカと、野球のない（≒野球ではなくクリケットを楽しむ）国イギリスとの対比を通して、アメリカ例外主義がほのめかされていることの証左となろう。

さらに、1951 年 10 月 3 日のポロ・グラウンドを舞台とする *Underworld* のプロローグは、翌日の *New York Times* の表紙で、この試合を決した Bobby Thomson によるサヨナラホームランとソ連が核実験に成功したニュースが並置されていることに着想を得て書かれたものである。John N. Duvall が "if October 3, 1951, exists as part of American consciousness, it is for Bobby Thomson's heroics, not Russia's atomic bomb." (294) と指摘していることは、この *Underworld* のプロローグでは、冷戦によるアポカリプスが目前に迫りつつあるなかで、ソビエトの核爆弾の恐怖を「打ち返し」、アメリカの意識から恐怖をかき消すことができるほどの強国アメリカのメトニミーとして Thomson のホームランが機能しうることを示しているとも考えられる。ここでも、冷戦期における東西の二項対立が、野球がある西側代表アメリカと野球がない東側代表ロシア（ソ連）として捉えられ、前者が優位であるとする視点の存在が垣間見えるのである。(Nakamura (2023)では、*Underworld* でこうしたテーマがいかに表象されているかも議論した。詳細はそちらをご参照いただきたい。)

GAN においても、ソビエトに亡命した元プロ投手 Gil Gamesh が、ソ連のスパイであることを隠しつつアメリカに戻ってきたのは、ロシアに野球がなかったからだと述べているし、さらにはロシアの子供たちは野球ではなく「粛清(Purge)」という遊びをしていると皮肉ってもいる(344)。このように、野球規則によって秩序が保たれている国技の存在は、共産主義に侵されていない健全な法治国家アメリカの代名詞として、政治的なコノテーションをも含み持っている。そして、こうした規則を持たない、もしくは守れない人種は、アメリカ人よりも劣った野蛮な人種という論理が働くことになるのである。

GAN にはこの論理に関連したエピソードが登場する。Mr. Baseball と呼ばれる Ulysses S. Fairsmith

[3] 佐伯泰樹は『ベースボールのアルケオロジー』の中で、アメリカで野球がプレーされるようになった 19 世紀初期は、規則が明文化されていなかったため、地方によって規則がまちまちであったこと、そして「ルールをわざわざ明文化しようという動きも起こらなかった」ことを指摘している（122)。その一方で、各地方で乱立状態だった規則も、1845 年に Alexander Cartwright らによって成文化されたことにより統一されはじめ、結果として現在の形に近い野球（ニューヨーク・ボール）が普及したとしている（143)。野球の歴史的にも、成文法の存在が競技の普及と発展につながっていたのである。

は、Albert Spalding が世界中に野球を広めようとした帝国主義的な試み同様、[4]彼の甥と共に野球を布教するためにアフリカまで赴いた。野球を学んだ現地の選手たちは、スライディングに楽しみを見出し、四球で一塁に出た際という、必要のないケースにおいてまでスライディングをするようになった。それを見た Fairsmith は、そうした野蛮な行為を中止するように指示する。しかし、現地人たちは、野球規則のどこにそんなことが書かれているのかと問いただす。Fairsmith は通訳の甥に、現地人に次のように返答するよう指示を出す：“You must explain to him that what we are dealing with here is a matter of *unwritten* law, or custom, but one so universally respected as to have the force and effect of every last rule in the rulebook.” (312; emphasis original)。確かに、四球で出塁した際に一塁にスライディングしてはいけないとは規則に書かれておらず、彼が認めるように不文律の一部なのだが、こうした不文律までの理解を現地人に求める姿勢は、前節の議論を補強する例となる。こうした無駄なプレーを否定するという実用主義的な思想を反映した不文律に納得ができない現地人は、槍を持って彼らを囲うという暴力的な訴えを起こす。そして、Fairsmith は儀式の生贄になりかけたところを、命からがら生き延びる、というのがこのエピソードの顛末である。

もちろん、不必要な場面でのスライディングはケガのリスクを高めるだけであり、中止するように指示すること自体は妥当な判断だろう。しかし、本作ではそういった安全面に言及されるのではなく、彼らがスライディングを続けるのは野蛮だから、という短絡的な思考に埋もれていることがポイントだろう。このエピソードで浮かび上がるのは、アフリカにおいて、アメリカにとっての「かくあるべし」を押し付けるとともに、彼らの行いを野蛮として蔑視し、あくまでもアメリカの優位性を保とうとする横暴さだからである。先ほどは、野球規則には「好ましい価値観の教材」としての一面があったことを指摘したが、Roth の作品中での野球規則は、法治国家アメリカのメトニミーとしての表向きの様相だけでなく、その裏側までも暴くための格好の皮肉の対象だったのである。[5]

他にも、*GAN* はルールの番人としての審判の役割も戯画化している。連戦連勝の天才ルーキー投手 Gil Gamesh は、人気であるだけでなく、強気で奔放な態度を取り続ける選手でもあり、その結果として、審判側が忖度しつつあった。

> Because of the rookie’s enormous popularity, because of the records he was breaking in game after game, because many in the crowd had laid out their last quarter to see Gamesh pitch (and because they were just plain intimidated), the umps tended to tolerate from Gamesh what would have been inexcusable in a more mature, or less spectacular, player. (58)

こうした野球規則が支配する世界の崩壊を危惧した Oakhart は、彼が“the toughest, fairest official” (58)と考える審判 Mike the Mouth に、Gamesh に対しても厳格にジャッジをするように依頼する。そして、Mike は Gamesh に対しても容赦なく退場を宣告するなど、球界の秩序を保つことに努めたのである。

しかし、事件が起きる。Mike が球審を務めていた試合で、Gamesh は完全試合を達成しようとしていた。ところが、かつて娘を誘拐され殺害されたトラウマがある Mike は、その犯人の姿が目に入ったように感じ、Gamesh の最後の投球（おそらくストライク、打者見逃し三振で完全試合達成のはずだった）を見逃してしまったのだ。こうした状況で、Mike と Oakhart は「審判が見ていないプレーは無効」というアドホックなルールをでっちあげ、その場をやり過ごそうとする。しかし、Gamesh は次の投球で 3 塁打を打たれ、完全試合はおろか、ノーヒットノーランすら達成できなくなってしまった。この結末に憤慨した Gamesh は Mike に向けてビーンボールを投げつけ、球界から追放されるという悲劇的な結末を迎える。Mike 側も、一命はとりとめるものの、発声できなくなり、審判として生きることはもはや出来なくなっており、どちらにとっても後味の悪い

[4] 平出隆『ベースボールの詩学』では、Albert Spalding による「スポルディングのオーストラリアン・ベースボール・ツアー」や後の「スポルディングのアラウンド・ザ・ワールド・ツアー」(1) について、詳述されている。

[5] Fairsmith たちを部族の儀式を通して暴力的に処刑しようした現地人たちが、自らを“a proud race” (312)と定義していることも、Roth のアメリカへの皮肉として読み取れないだろうか。自らを誇り高い国家であると標榜している一方で、世界の警察として武力に頼っている国家アメリカは果たして野蛮でないと言い切れるのであろうか。Roth が描く架空のアフリカ野球は、逆説的に文明化しているはずのアメリカの野蛮性を逆照射しているとも考えられる。

結果になってしまったのだ。

こうした規則が伴いうる恣意性が招いた悲劇は、規則とは絶対的な文書である一方で、状況に応じた恣意的な解釈を許す揺らぎを孕んでおり、決して安定しきったものではないことを示唆していると言える。野球規則側ももちろんこうした状況を想定しており、「審判員は、本規則に明確に規定されていない事項に関しては、自己の裁量に基づいて、裁定を下す権能が与えられている」（『公認野球規則』8.01[C]）と規定している。しかし、どこまで審判員の裁定を信頼できるだろうか。こうした要素も、Roth にとっては皮肉の対象だったのだ。[6]

このように、野球規則に付随する恣意性がアメリカの帝国主義的思考や審判という権威に結びつく様を振り返ってみると、いかに Oakhart の野球規則への盲信が皮肉の対象とされているかが理解できる。彼が盲信する通り、野球規則は万能で、アメリカの好ましい精神性を表象するものかもしれないが、実際には Roth が巧みに皮肉ったように、決して絶対的なものではない。むしろ、規則とは恣意性を排しているようで排しきれていないという点で、脆いものでもあるのだ。*GAN* がアイロニックに描く野球規則を巡る物語は、「変わりゆくアメリカで変わらないものである野球」を定義する野球規則に内在する脆弱性をも浮き彫りにしているのである。

4. 規則が規定する「野球の物語」

Joseph S. Walker は、本稿でも先ほど紹介した Paul Auster の作品では、野球が繰り返し登場するモチーフであることに触れつつ、Auster が Paul Benjamin の偽名を用いて書いた探偵小説 *Squeeze Play* (1978)における野球の役割を論じる際に、以下のように述べている。

> Like life in any contemporary society, baseball is governed by a set of strictly enforced rules and regulations. . . . These rules, however, do not make the outcome predictable; as in life (particularly life in an Auster novel), chance and circumstance combine to produce wildly unexpected results. This occurs . . . constantly: every pitch, every swing of the bat reshuffles the cards, establishing a new order that will itself shortly be demolished. The game, then, is a continual confrontation between order and chaos. (399–400; underline mine)

つまり、ルールの存在は、野球を野球としてプレーさせるための条件である一方で、それはあくまでスポーツとしての枠組みを提供しているに過ぎず、野球というスポーツの可能性を縛るものでは決してない。有限の規則は、選手を縛り秩序を維持しつつも、それ以上に無限の予見不可能なイベントを引き出す触媒であり、ルールの中で思いもよらないことが起きることこそが、野球（ひいては人間・世界）の面白さを保証する要素となるのである。

Auster 作品においても、こういった人生の無限の可能性を体感する人物が多々登場する。ここでは、彼の 1989 年の作品 *Moon Palace* の主人公 Marco Fogg を取り上げてみよう。コロンビア大学を卒業したものの、孤児であった彼は無一文の状態にまで沈んでいき、セントラルパークでホームレス生活を送るなど、人生の浮き沈みについて否が応でも意識することになる。彼はセントラルパークでのホームレス生活中に、ごみ箱から漁った新聞でシカゴ・カブスについての記事を読み、次のように考える。

> I tracked the spectacular fall of the Cubs with special interest, marveling at how thoroughly the team had unraveled. It was difficult for me not to see correspondences between their plunge from the top and my own situation, but I did not take any of it personally. . . . [T]o witness their sudden, wholly improbable surge from the depths seemed to prove that anything in this world was possible. There was consolation in that thought. Causality was no longer the hidden demiurge that ruled the universe: down was up, the last was the first, the end was the beginning. . . . reality was a yo-yo, change was the only constant. (61; underline mine)

人生のどん底に沈んだ Marco にとって、カブスの順位が急落し、予定調和にならない世界の可能

[6] こうした権力側の恣意的な解釈変更の危険性への言及は、近年の例で言えば、Black Lives Matter 運動などで明るみになりつつある、警察の黒人への暴力や不当な取り調べなどに対し、信頼に足るべき警察側が、恣意的に解釈変更を繰り返し、暴力を正当化してきたことへの皮肉にもなろう。

性を知ることは、人生においても、法律や規範・制約に縛られつつも、偶然の連鎖の果てに、何が起きてもおかしくないことを悟らせる。このような可能性や不確実性を生み出すのは、規則の存在によって野球界の調和が保たれてきたからなのであり、それにより、Marco は自らの物語を野球の物語に重ね合わせ、野球を精神的支柱として捉えていたのである。

もちろん、こうした要素は野球に限らず全てのスポーツに当てはまることではあるが、規則により枠組みが設定されつつも、結果は決して予定調和にならないことが数々の「劇」を生み出し、多くのファンを魅了してきたことは紛れもない事実である。本稿を執筆している頃、侍ジャパンは World Baseball Classic で 3 大会ぶり 3 度目の優勝を果たし、日本中が大いに沸いていた。特に盛り上がったのが、準決勝メキシコ戦での「劇的な」逆転サヨナラ勝ちであろう。[7]そもそも、このサヨナラ勝ちが劇的になるのは、「9 回裏が終わった地点で得点の多い方が勝ち」という規則が存在するからである。たとえ普段意識されることはなくとも、野球規則は野球というスポーツをドラマ化(Dramatize)する縁の下の力持ちなのである。[8]

こうした土台に支えられ、アメリカ野球文学史の系譜でも、9 回裏を舞台とした物語が多数生み出されてきた。Ernest Lawrence Thayer の *Casey at the bat: A Ballad of the Republic, Sung in the Year 1888* という野球文学作品の始祖として位置づけられる作品ですら、すでに 9 回裏を舞台としていた。The Mudville の強打者 Casey が、2 対 4 の 2 点ビハインドの 9 回裏 2 アウト 2、3 塁で打席に立つ。ホームランが出れば逆転サヨナラ勝ちの期待が球場で高まる中、この詩は Casey の結末を次のように描く：

> The sneer is gone from Casey's lip, his teeth are clinched in hate;
> He pounds with cruel violence his bat upon the plate.
> And now the pitcher holds the ball, and now he lets it go,
> And now the air is shattered by the force of Casey's blow.
>
> Oh, somewhere in this favored land the sun is shining bright;
> The band is playing somewhere, and somewhere hearts are light,
> And somewhere men are laughing, and somewhere children shout;
> But there is no joy in Mudville – mighty Casey has struck out. (qtd. in Dawidoff 15)

球場中の期待を裏切るかのように、Casey は最後の打者として三振を喫し、チームの敗北が確定する。しかし、平出隆は『ベースボールの詩学』で、このアンチクライマックス的展開こそが、後のアメリカ野球文学において、この詩が語り継がれてきた理由であると述べている：

> 最終回二死ランナーなしという絶望的な状況が、徐々に大逆転の可能性に変り、二点差で二死二、三塁というこのうえないお膳立てのととのったところで、いよいよケーシーの出番となる。彼の一挙手一投足を、観衆は固唾を呑んで見守る。（中略）最終連の絶唱に入り、うららかな大地のひろがりが讃えられたところで、そのひろがりが、ケーシーの一撃によって、ではなく、彼の空振りによって、一挙に打ち消されるのである。
>
> この詩篇が、のちに書きつがれてきたベースボールの詩群の総体にとって、なお重要な位置を占めつづけている理由は、（中略）劇的な設定の無化、つまり台無しに向って一気に雪崩れていくところにある、といわなければならない。（中略）
>
> 空振りであることによって残されたものは、反対に、じつに豊かである。（中略）つまり、

[7] この逆転サヨナラ勝ちが特に印象的なものとなったのは、前年度 NPB の日本人左打者の年間ホームラン記録を打ち破った村上宗隆選手がサヨナラ打を打ったからとも言える。「村神様」の異名を得るほど、その実力に日本中が期待した半面、WBC 大会前半期間、彼は不調で、この準決勝でもすでに前の 4 打席で凡退していた。そんな彼の復活を示した 5 打席目のサヨナラ打は、村上選手個人のナラティブと合成され、「村神様復活譚」とでも呼ぶべき「逸話」として、メディアで大々的に扱われた。本件は、こうした「逸話」の集積こそが野球の歴史であることを示す好例となろう。

[8] Paul Auster が、先ほども引用した *The Invention of Solitude* において次のように子供時代を回顧していることは、ヒーローに憧れるアメリカの少年が自らを主役に据えた想像上の野球ドラマにおいても、9 回裏が格好の舞台であったことを示す好例となる：“It always came down to two outs in the bottom of the ninth, a man on base, the Giants trailing by one. He [Auster in his boyhood] was always the batter, and he always hit the game-winning homerun.” (123)。

> バットで空を切る豪快な裏切りによって、詩は、夢見られた「大逆転」をまったき夢の中に凍結させ、そのことでかえって、このベースボール空間の細部から全体にわたるヴィヴィッドな緊張を成就しているのである。(175-176)

すぐそこに負けが待ち構えている絶望的な状況を打破できるような一抹の希望への期待が最大化したところで、Casey の空振りにより、作品は一気に幕を降ろすというこの物語の構図は、まさに予定調和にならない、希望通りの結果が約束されていない野球（スポーツ）の性質を如実に示すとともに、いかに野球が文学作品において豊かな世界観を構築するポテンシャルを持つかを示している。そして、平出が指摘したように、こうした「敗北の物語」がアメリカ野球文学の系譜におけるプロトタイプともなったのである。[9]

野球小説の先駆者とされる Bernard Malamud の *The Natural* (1952)も、こうした敗北の物語を引き継ぐ一例である。主人公 Roy Hobbs は、作品の終盤、９回裏、一打逆転サヨナラ勝ちのチャンスで打席に立つ。まさに Casey さながらの状況で打席に立つ彼は、その試合に負けるようにと八百長を持ち掛けられていた。彼は最終的に、チームのためのバッティングをし、チームに勝ちをもたらそうと決意したものの、運命は彼がヒーローになることを許さず、彼は三振に倒れてしまう。さらに、八百長が発覚し、彼は球界追放処分を受けてしまう。彼は、９回裏の最後のバッターとして、チームの負け（死）だけでなく、自らのプレーヤーとしての「死」までも引き起こしてしまったのである。[10]

ここまで、9 回裏を例に、野球の枠組みが提供する物語性が反映された文学作品をいくつか取り上げたが、ここで再度おさえておきたいのが、9 回裏が劇的になりうるのは、すぐそこまで結末が近づきつつも、それでもまだ何が起きるか分からないというスリルがあるからである。選手も観客もこの規則の枠組みがもたらしうる偶然性を受け入れることで、野球のドラマを楽しむことができるのであり、ドラマティックであるには予定調和であってはならないのである。

こうしたことを踏まえると、枠組みの軸となる野球規則を不用意に変更することは慎まれるべきという見方もできる。もちろん、現状の後追いに過ぎない野球規則は、現状に適応すべく改善が求められるものだ。しかし、それを「不用意」に行う、つまり、何らかの理想化された野球を作り出すために規則の改変をした場合、それには危険が伴うことになる。

この点を考えるために、Robert Coover の *The Universal Baseball Association, Inc., J. Henry Waugh, Prop.* (1968)を取り上げよう。この物語は、こうした野球規則が生み出しうるナラティブの蓋然性を恣意的に破壊した人物の物語だからだ。中年の会計士 Henry が自身の頭の中で作り上げている野球協会「ユニヴァーサル野球協会」では、彼のサイコロの出目にしたがって、試合が進められていく。しかも、現実の野球界でプレーなどが起こりうる確率と、3 つのサイコロの出目の確率を近づけることで、彼の脳内野球の現実性を高める工夫までしているという徹底ぶりである。そのように行われたある 1 戦で、ルーキー投手 Damon Rutherford が完全試合を達成することになる。この完全試合は、先述したような規則に沿って行われた、サイコロの出目による偶然の産物であり、ゆえに Henry は名状しがたい恍惚感を得ることになった。しかし、Damon が投球する場面をより頻繁に見たいと思う有頂天な Henry は“It wasn’t the recommended practice to start a pitcher after only one day of rest, but it wasn’t against the rules.” (63)と正当化し、Damon の通常の登板スケジュールを変更してまで、彼を先発投手に選んでしまう。協会の秩序が Henry の恣意的な判断により歪められつつある中行われたその試合で、Damon は、これもまたサイコロの出目により頭部死球を

---

[9] Nicholas Dawidoff が“The lesson, it seems, is that baseball is interesting to writers because the game and its practitioners are as prone to fever and flaw as the real world they inhabit. . . . There is so much failure in baseball, and the good writers, like Don DeLillo, can never get enough of it.” (9)と述べるように、3 割打者でさえ 7 割は凡退している野球の世界は、成功ばかりではなく、むしろ失敗の方が多い現実世界の反映をしているとも言える。その一方で、年間 100 を超える試合があり、その試合の中でも複数打席が回ってくるように、野球は「次のやり直すチャンス」を期待しやすいスポーツであるとも言える。こういった要素をもとに、野球は「敗北の物語」の素地を提供してきたのである。

[10] Malamud の *The Natural* は Black Socks Scandal を下地にした野球選手の失墜の物語であるなど、アメリカ野球史への引喩がふんだんに盛り込まれており、クライマックスに 9 回裏が設定されていること以外にも、野球表象については枚挙にいとまがないほどの論点がある作品である。有名な話だが、本作の映画版では、Roy は逆に逆転サヨナラホームランを打つという、カタルシスのあるエンディングに変更されており、小説とは違ったハリウッド映画としてのイメージがかなり前景化されている。

食らい、命を落とす。Damon という名選手を英雄化すべく自らの理想に沿った物語を作り出すことに偏重し始めた Henry に、この Damon の殉職は甚大なショックを与えた。そして、その後の Henry は、Damon を殺したピッチャーCasey が罰されることを望みながらサイコロを一心不乱に振り続けるも、むしろ、Casey が好調を維持するという皮肉な結果が続くことになる。こうした思い通りにならないサイコロとそれが生み出すナラティブに落胆した果てに、Henry は自らサイコロの出目を指定し、Casey を殺す選択をするに至る。サイコロの出目によって結果が決まる、つまり、偶然に左右されるもののルールによって安定化された聖域を、彼は自らの手によって破壊したのだ。

Henry は理想を追求するあまり規則を破ってしまったが、これは野球というドラマの筋書きの出来/不出来に関わるという点で、まさに「野球の物語論」に関わる問題である。こうした観点について、吉田恭子は次のように論じている。

> ヘンリーの空想世界は登場人物たちの命運を創造主のヘンリー自身が自在に決定することができないことで蓋然性を保っていたが、ここに至って恣意的な介入を行い、空想世界の住人を処刑することになる。これは文学的効果を成就させるために、韻律・文法・論理・事実（物理法則など）に関する破格や逸脱が許容される、詩的特権（poetic license）の行使といえるかもしれない。サイコロですべての運命が決まるというリスクとチャンスに支配されていたゲーム世界の根幹にかかわる決まりに例外を導入したことで、ユニヴァーサル野球協会は同じ試合を宗教的再現劇（passion play）のようにくりかえし再現し続けるようになる。（138）

吉田が指摘する「詩的特権」は、本プロジェクトのテーマ「文法とレトリック」と本稿の接続点を担いうる概念である。ここで、詩的特権とは、必要に応じて使用が認められる特権であることに注意したい。詩的特権はレトリックとして効果がある範囲においてのみ有効であり、濫用された場合、もはや芸術としての価値が損なわれることになりうるからだ。Henry による詩的特権の行使は必要だったのか。答えは No だろう。これまでの議論で明らかにしてきたとおり、そもそも存在する野球規則、そしてそれに基づき Henry が作り上げたサイコロの出目による可能性を示したチャートだけで、Henry の脳内物語は物語として十分機能していたからだ。Henry によるプロットへの恣意的な介入は、不用意な特権の行使であり、結果として Henry の虚構世界は彼の理想に従って再生するのではなく、むしろ「硬直し、猥雑な活気を失い、（中略）『かくあるべきである』というドグマに支配された儀式世界へと変貌してしまう」（吉田 139）のである。「ドグマに支配された儀式世界」とは予定調和な世界の一部であり、Henry による規則への、そして規則が維持してきた偶然性への越権行為は、野球が持つ「本来の美徳を破壊し」（吉田 140）、結果として予定調和で生気のない世界を作り上げる行為だったのだ。さらに、この虚構世界が崩壊することで、Henry 自身の現実世界も崩壊したという点において、彼の越権行為はまさに命とりでもあったのだ。

ここまで述べてきたことは、詩的特権を行使し規則を破ったとしても、それに見合うだけのリターンが必ずしも存在しないことを示している。むしろ、平衡感覚のない行き過ぎた行為が引き起こす代償は、Henry の場合のように、取り返しがつかない結果を招きうる。[11]この意味で、結局は何事も「バランスが大事」という陳腐な命題に回帰しうる。とはいえ、この命題は陳腐でありつつも、簡単に達成できるものでもないと、誰しもが経験知として持っていると言っても過言ではない。事実、このバランスの追求という命題は、野球規則が苦心してきたものである。

Steven P. Gietschier は *The Cambridge Companion to Baseball* の “The Rules of Baseball” という章で、野球規則の変遷を要約しているが、 “Since baseball’s rules were first codified in the nineteenth century, various rules committees have made adjustments to maintain a suitable competitive balance between offense and defense.” (9)と述べることから始まり、“The quest for equilibrium between offense and defense” (13)、“frequent adjustment to achieve a desirable balance between offense and defense” (14)、“Several twentieth-century rules changes . . . addressed the delicate balance between batter and pitcher” (16)と、言葉を変えつつも、いかに「バランスの維持」が野球規則改正で重要視されてきたかを繰り返し述べている。

---

[11] Henry のこうした平衡感覚を失った行動により、バランスを失ったユニヴァーサル野球協会の歴史をまとめた書物のタイトルが “*The UBA in the Balance*” (212)というのも、なんともアイロニックである。

野球規則が攻撃側と守備側の「suitable で desirable で delicate なバランス」を維持するという難題を解決すべく存在していることを踏まえると、文学作品に野球規則が言及されることの意義のもう一つの側面が浮かび上がる。既述の通り、*UBA* の Henry は仕事/プライベート、現実/虚構のバランス感覚を失うだけでなく、野球規則と彼が作り上げたサイコロの出目によって試合が進む、蓋然性が維持された世界を恣意的な介入により破壊した存在だった。これは、「suitable で desirable で delicate なバランス」を維持すべく存在していた規則を Henry が破ったことが招いた破滅と言い換えられる。皮肉なことに、Henry 自身は、こうしたバランスについて自覚していた存在だった。

> American baseball, by luck, trial, and error, and since the famous playing rules council of 1889, had struck on an almost perfect balance between offense and defense, and it was that balance, in fact, that and the accountability – the beauty of the records system which found a place to keep forever each least action – that had led Henry to baseball as his final great project. (19)

こうした野球が持つバランスに魅了されていた Henry ですら、私欲に抗えず破滅を迎えてしまうという本作の展開が示唆することは多いだろう。このように、*UBA* における野球規則は、バランスの取れた調和世界を描く媒体であり、「詩的特権の行使」であった Henry の行為が招いた悲劇の下地として機能しているのだ。

他にも、先述の Roth による *GAN* においても、詩的特権の行使について言及がある。本作の語り手 Smitty は 87 歳で入院中の存在であるが、文章中に頭韻を使いすぎることを医師から注意されるというコミカルな描写がある。彼は医師から頭韻を使って文章を書くことを禁止されたのち、次のような会話をしている。

> “And – and how’s about reading alliteration, if I can’t write it?”
> “For the time being, I’m going to ask you to stay off it entirely.”
> “Or?”
> “Or you’ll be a goner. That’ll be the ballgame, Smitty.” (11)

野球に関連した慣用句で医師が Smitty に警告しているという、Roth のユーモアが見える会話であるが、やはりここでも野球に関連し、「バランス」がキーワードとなる。というのも、ここでは、Smitty 自身の文字書きとしてのバランスを失うことが命取りになると医師から警告されているからである。[12]詩的特権にも限界があり、ある閾値を超え文学作品としてのバランスが破壊されてしまえば、それはもはやレトリックではないということが、改めてここでも示されていると言える。Smitty が本作の長大なプロローグで行うような頭韻の連続は、行き過ぎた場合、文学作品として何も伝えないことになりうるからである。

こういった点を踏まえると、*UBA* では Henry によるナラティブへの詩的特権の行使が、*GAN* では Smitty による頭韻の使用過多という詩的特権の行使が引き起こしうる物語世界の崩壊という共通点が、ともに野球小説のキャノンとされる作品で反映されていたことになる。ここに、野球文学について文学研究の立場から述べてきた本稿が、本プロジェクトのテーマ「レトリックと文法」と奇しくも接点を見出したと言えるだろう。野球も一つのフィクションであり、ナラティブを作り出すものである以上、こうした詩的なレトリックと無縁ではないのである。

5. 終わりに – イデアとしての野球の行方

本稿では、アメリカ文学作品における野球規則に関連する言及に着目しながら、作家の想像力とアメリカ的価値観を代弁する文書としての野球規則が接続されることで、いかにアメリカが表象されてきたを議論してきた。最後に、こうした野球規則を出発点に文学を読み解くことで得られる視点が、言語学者や文学研究者に、そして、野球というスポーツの未来に与えうる示唆について言及し、本稿を閉じたいと思う。

---

[12] *GAN* において、Smitty の友人として登場する Ernest Hemingway が作家としてのバランスを失い、自ら命を絶ったことに言及されていることも、バランスの重要性を暗示していると言えるだろう。

まず、野球規則がアメリカ的価値観を教示する媒体でありつつ、そこに規定される「好ましいアメリカ的価値観」はアメリカへの同化を求めるための下地に過ぎず、その好ましい価値観を享受できるのはある種特権的であり、付随する不文律まで理解する必要があると述べた。これを言語のケースで考えてみると、例えば、規範文法の議論との接続が可能であろう。「文法的に正しい」とはどういうことか、誰にとって正しいのか、どう正しいのか、といった問題を考える際、野球規則をめぐる議論は援用可能だろう。こうしたアナロジーは、規則なしでは混沌が訪れる一方で、規則が存在することで浮かび上がりうる「副反応（差別・特権化など）」、もしくは規則が権力と結びついた時の危険性などに目を向けさせることに貢献しうるだろう。

その一方で、ルールを破ることが *UBA* の Henry を破滅させたように、規則は越えてはならない一線を規定するものでもある。上述した通り、*UBA* や *GAN* から読み取るべきは、文法を逸脱し、音韻・比喩を優先するなどして、読み手の心に訴えかけようとする芸術家たちの試みにおいても、越えてはならない閾値の存在なのである。その意味で、野球規則がバランスの追求に苦心してきたように、芸術家にもバランスの追求が求められていると言える。「形無し」と「型破り」は違うとよく言われるが、言語における形を文法とし、本論と接続するならば、前者は「文法を無視（軽視）したもの」、後者は「あくまで文法を踏まえた上でのバランスの追求の結果」と言い換えられはしないだろうか。

さて、締めくくりとして、本論が試みたような野球文学を読み解くことで得られる視点を、野球というスポーツそのものに対して投げかけてみたい。本論では、*UBA* の Henry は、野球規則によって調和が保たれていた世界に恣意的に介入することによって、その世界を破壊した人物だと指摘した。その一方で、Henry は「一見無味乾燥な数字の羅列にナラティブを読み解くことができる職業、会計士」（吉田 120）であり、野球の統計が持つ歴史性を十分に認識していた存在であることも見落としてはならない。吉田恭子が指摘するように、野球の歴史は統計によって紡がれており、「20 世紀初めにプレーした物故選手と今日なお活躍している選手が統計という数字を通して出会い対決すること」を可能にしてきた（117）。しかし、恣意的な規則の改正は、このような野球の歴史が時代を超越していくことに終止符を打ちうるというリスクもある。先述のように、規則は現実の後追いに過ぎず、プレーヤーの能力・道具・環境など、様々な要因により野球がその容貌を変化させる以上、規則改正は必須のプロセスである。しかし、規則が「野球の物語」の構成要素の 1 つであること、そして野球の歴史とは「野球の物語・逸話」の集積である以上、不用意な規則改正は、統計を通した超時間的なナラティブとの邂逅を不可能にしうる。野球の逸話を作り出す縁の下の力持ちとしての野球規則の存在意義を認識することは、Paul Auster や映画 *Field of Dreams* に登場する隠遁作家 Terence Mann などが指摘する、「変わりゆくアメリカで変わらない心の拠り所」としての野球の存在意義を維持することに寄与しうるのではないだろうか。

GAN の General Oakhart は、上で取り上げた引用で“don’t try to shorten the base paths in order to reach home plate faster and score. All you have accomplished by that technique is to cheapen the value of a run.”と子供たちに熱弁していた。奇しくも、本稿執筆中の 2023 年の規則改正では、MLB がより大きなサイズのベースへの変更を決定した (Castrovince)。ベースが大きくなったことにより、走者が走る塁間距離は実質短縮されたことになるわけだが、これに対して Oakhart は何と言うだろうか。なお、この規則改正は、選手の安全面を保証することを目的としたものであるが、その一方で、野球人気の低迷への対抗策として講じられたという側面もある。つまり、ベースを大きくすることで、盗塁を増やし、試合中の見せ場（＝動の部分）を増やすことを目的にベースが拡大されたのである。野球人気が落ちつつある 21 世紀においては、野球も生き残りをかけ、こうした規則改正が必要性に迫られているのである。

こうした 2023 年の規則改正は、2023 年版の『公認野球規則』の「はしがき」では、「野球の本質的な面白さ」を増やすためのものとされているが、とはいえ、「野球の本質」とは何なのか。棒で球を打つという野球の起源は、少なくとも古代エジプトにまでさかのぼれる以上(Gietschier 9)、こうした野球の本質をどこに探し当てるべきなのだろうか。佐伯 (2014)や平出 (1989)などで何度も言及されているように、アメリカにおいては歴史的正確さよりも、クーパーズタウン神話に代表されるような理想論の方が好まれており、野球の本質をたどることは困難な試みである。実際、おそらくどの立場に立ったとしても、その時代時代に沿った理想論のアマルガムが、野球の本質を定義してきたと言うより他にないだろう。こうした野球人気の復興を目的とした規則改正が目

立つ近年、Henry が自らのイデア世界を構築するために恣意的に規則を改変したような、ある特定の立場から恣意的に野球というスポーツを定義する規則を変更することが起こらないとも言いきれない。Henry の物語が示唆するのは、一瞬のイデアを作り上げるための規則への介入の危険性だった。この視点は、こうした現実世界での規則改正を考える際の視座にもなる。本稿で見てきたように、野球規則自体も、様々な思想（イデオロギー）、時代背景のアマルガムであるという点で、文学作品の一種とも呼べ、時代によって揺れ動きうるナラティブに過ぎない。こうしたことを踏まえると、改めて、本稿で試みたような野球規則に言及した文学作品を読み解いていくことが示唆することは多いと言えるのではないだろうか。

参考文献

邦文文献

佐伯泰樹『ベースボールのアルケオロジー』悠書館、2014 年。

平出隆『ベースボールの詩学』筑摩書房、1989 年。

日本プロフェッショナル野球組織、全日本野球協会（編）『公認野球規則』ベースボール・マガジン社、2023 年。

吉田恭子「野球ゲームに詩はあるか？－ロバート・クーヴァー『ユニヴァーサル野球協会』の統計と詩学」『テクストと戯れる―アメリカ文学をどう読むか』、高野泰志・竹井智子（編）、松籟社、2021 年、pp.115–143.

英文文献

Auster, Paul. *The Invention of Solitude.* Faber and Faber, 1982.

---. *Moon Palace.* Faber and Faber, 1989.

Barzun, Jacques. *God's Country and Mine: A Declaration of Love Spiced with a Few Harsh Words*. Little Brown, 1954.

Castrovince, Anthony. "Pitch Timer, Shift Restrictions among Announced Rule Changes for '23." *MLB.com*, 2 Feb. 2023, https://www.mlb.com/news/mlb-2023-rule-changes-pitch-timer-larger-bases-shifts.

Coover, Robert. *The Universal Baseball Association, Inc., J. Henry Waugh, Prop*. Plume, 1968.

Dawidoff, Nicholas, editor. *Baseball: A Literary Anthology*. The Library of America, 2002.

---. Introduction. Dawidoff, pp. 3–11.

DeLillo, Don. *Underworld*. Picador, 1997.

Duvall, John N. "Baseball as Aesthetic Ideology: Cold War History, Race, and DeLillo's 'Pafko at the Wall'." *Modern Fiction Studies*, vol. 41, no. 2, 1995, pp. 285–306.

Elias, Robert. "A Fit for a Fractured Society: Baseball and the American Promise." *Baseball and American Dream: Race, Class, Gender, and the National Pastime,* edited by Elias, Routledge, 2016, pp. 3–33.

Gibbs, Raymond W., Jr. "Process and Products in Making Sense of Tropes." *Metaphor and Thought,* edited by Andrew Ortony, 2nd ed., Cambridge UP, 1993, pp. 252–276.

Gietschier, Steven P. "The Rules of Baseball." *The Cambridge Companion to Baseball*, edited by Leonard Cassuto and Stephen Partridge, Cambridge UP, 2011, pp. 9–20.

Roth, Philip. *The Great American Novel*. Vintage Books, 1973.

Umphlett, Wiley Lee, editor. Introduction. *The Achievement of American Sport Literature: A Critical Appraisal.* Associated University Presses, 1991.

Malamud, Bernard. *The Natural.* 1952. Farrar, Straus and Giroux, 1980.

Nakamura, Mizuki. "Embracing Failure: Baseball as a Catalyst for Self-Reflection in Don DeLillo's *Underworld*." *Ex Oriente*, vol. 27, 2023, pp. 285–306.

Walker, Joseph S. "Criminality and (Self) Discipline: The Case of Paul Auster." *Modern Fiction Studies*, vol. 48, no. 2, 2002, pp. 389–421.

Wilson, August. *Fences.* Plume, 1986.